

和歌集



六十三

内閣文庫			
函	冊	號	類
二	一〇	二〇	和
二	〇	〇	書
〇	〇	〇	架

(和歌集)

内閣文庫			
番號	和	28420	
冊數	100 (63)		
函號	211	300	



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak 2007 TM, Kodak





明治十二年



鹽尻卷之六十三 享保

平徳子院先法能劫文

名沙雷雨島々半

筆巻のこゝ

新歲岡常春

乙流一笑

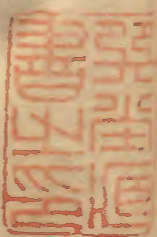
振衣子何因

性急冠士七回の忌辰

予々ト能の男

遊舟眉山

丁酉有於火災



如涉内公武法任官之事

寧一山四百年忌

七十五の春

吾妻人子遠々詩

西漢の附集北名外

妙法破形答

東より功法ノ周書

電空先元且の一偈

一心後居祖丈法流

廣法淨寺上元初春之韻

七日の夜に火の事

花頂右沙の事西屋程舎

下作の事と賣し女医

下酒奈良系夜火災

立卷上人の致

庭の梅盛たる事

仏涅槃後序中自云の事

日懸觀の事と記すの致

下酒東起右地蔵

敷盛の室の致事と信守の事

石津梅物の事

下酒東起右火

先元女子自進貢

下酒新廟年祥の記

阿沙泥古本像入藏相特造

○正徳六年丙申六月廿二日未刻修事定

同日同日申刻改元定

御南殿 次第如先規

上卿

近衛右大臣

廣幡大納言

一條大納言

滋野井中納言

油小路中納言

今出川中納言

風早宰相

甘露寺宰相

園 宰相

油小路前大納言

庭田頭中将

傳奏
奉行

諸家勘文

天業 周易曰聖人以通天下之志以定天下之業

元文 周易曰黃裳元吉文在中

大曆 晉書曰應大曆曆聖世相兼

享保 後周書曰享茲大命保有万国

明室 藝文類聚曰復子明辟還氣室國

右 兼原 式部權大輔菅原長義

保和 周易曰乾道變化各正性命保合大和乃

利貞

元長 周易曰元善之長也

天明 孝經曰則天之明因地之利以訓天下

万室 文選云蕩乎大乎万室以之化

和德 周易曰和順於道德而理於義理盡性以

至於命

右 高辻 文章博士菅原總長

大享 周易曰大享無咎而天下隨時

文長 史記曰文武並用長久之術也

天龜 介雅注疏曰天龜俯地龜仰東龜前南龜

御西龜左北龜右各從其耦

右東坊城大學頭菅原資長

明和 尚書曰百姓昭明悞和万邦

嘉延 藝文類聚曰嘉祚日延

右五條侍從菅原在廣

紹明 尚書曰紹天明即命

天保 毛詩曰天保定命

尚書曰欽崇天道永保天命

延享 藝文類聚曰聖主壽延享祚之吉

右清岡侍從菅原致長

○八月十三日關東御任次第別記

十一月朔日撰改輔實公御辞表復辟

同日 關白 宣下 詔書

同日十三日女御入内 次第別記

關東御使 松江侍從 宣澄

同日十九日關東三家及諸大名登營賀

女御入内

同日廿三日關東西使賞行

松江侍從宣澄右在滿權少將中條對言只從四位上

十二月廿六日西使侍從宣澄 勅答之旨言上

十二月朔日 近衛相國御使登營

かゝるやをくに女もたゞはつねにありき世の
すゝ何うて定かりき元々忍土極樂の界誰の
やもくく小生を遊け侍々き思ひかけなき計なき
愁たゞも恨之外こに出しむきを見徳を安ん
厭雜の思ひなきことみあはるらんを速懐の
歎すはつりて

かくてよにをりおれぬのを控やん
おれぬ思ひのすゑのあり

○濃陽武藝郡神洲山龍門禪寺、元保寧一山妙
慈弘濟國師退位の古刹也國師、禪宗の建長寺法眼の
南無とく歴任より元保元年
十月に之を其保政元初を念す國師四百年の

き忘りて茲に見任大願和尚を乞へて祖
忌を修せり予東都よりきて是を安んじく國師
所傳の静養の二書をもつて是を安んじく茲に
よびてんを修り後國を備月を願ひ紫藤を
とつていざ修り消了して是を安んじく縁
亦坊の書法を出して神洲寺什の物も元人書
を法次師謝す曰く我山四至の法書公存故
以て有司傳授し又本國國祖の志法を修りて
本國師の法も十二月廿上巻のりありて日た
是心重し亦奇事なり是靈燈の地を安んじく
堪きり為き禱安を莊く新法を掲げん

寺社
の修録

年一有之と云ふ事二也を 予も亦花亡の冥福を薦ぐべ
きてははるかにと云ふ 且六無門のたゞこゝも畏れし不思議の因縁を
予も一いつ偈を包帯を奉げ

混々龍門雲外浪 金鱗一躍脱神淵
古洞静愛雪支白 空月空風四百年

○ 歳暮の歌

昔々くゆく年終るるを
と云ふ事かかしの日暮ものさし

○ 吉水の和尙の 自のあつてふまよの爰のしむつてを
くろくもくもくいふにやましと云ふ事
侍りし一りり年も怖るぬ 尊徳二年酉 如きより老の

浪をちゆくをむ之て

柳眼相親幾度春 轉因梅曆笑寅津
太年入才河函收 七樹天機又一新
予年五才五仍て三句云ふ

○ 春日の社に淡くを

あゝこの年のたはたうき玉かの良
かゝてあやうなる公りのをも
吾妻よりせりてのみを

読もいひもいひもを
妻のしきやまをけ
山家集よりしき

布りぬこは名ぞしほりて紫の戸も
ワサミぬもろくやその福もぬん
初更の心を

乞のこは雷もそくりにむくはて
下もろくむか世急の多き

○ 秋嵐岡常舞有感

蕭條柳運一聲音 巧舌為誰語故情
乍暖難消頭上雪 知乎吾亦不平鳴

因一以東より人の老書より書きししりかへん見ん
侍りしりい區事より老い

去歲滿東棠柳眼 今春蓬左惹花情

山長水遠悵望裡 無限好音千里當

○ 一談一笑俗相看 杜工部う徳を一人日の時もある
縷金糸練の風雅なりといとも疎柳柴梅自花傍
とす方に是より

老屋残雪彩暈庭 春野春看生茶香

涉七日新晴亦好 東風初傳百花聲

美菜の影より

とく妙のむ柳海の水たうは水

新神の守りて春の比と云々

○ 西漢の財集の名は 經子 東漢よりして銘頌院記
の類文章の流流漸く廣く集るを察し

此乃文集の名初く著せしむる 詩藁 遠途 我國和歌の

集を著せしむる何れなりて古今集以下代々の勅撰

絶侍の次

○ 振衣を似岡濯足万里流 大冲

志士惜日短愁人知夜長 休爽

富貴他人合貧賤親戚離 顔遠

禪噪林逾靜鳥鳴山更幽 王籍

是亦晉人の雜言としてそのくは世に獨歩する程

をいふ 淵明の采菊を秀潤とすべし

○ 三年台宗の僧妙法在俗答 四冊 を述べて日蓮宗

の非義を弁し 密教の比丘非社考非社啓蒙の

無疑を答して儒士の佛法を舐排するを破せし

凡そ儒釋の学異して彼此毎々是を諱ふは

むろしき日徒と法宗と古くより公のけしん

やも才非角口筆陳文及よと世其書多し終る

日徒の筆常々能く偽妄少くなく其歌曲を回復

せんとするは書成て其非ありて歎ふべし

法宗の學者其破文ありていふは是は法宗大聚

人我の思ひより彼を非く此を是とする言痛ん

よりきく然して自身に香ありては此れ

臭弃のためを聲を失ひ侍らん日徒の非法を

知る愈正法の真諦を畏れずし 花頃の義出

の深奥に有る無何派陀佛經念

○享保二年正月四日亥の刻南庭奥福寺後堂より出
火し諸堂皆焼失

講堂 内規北一間 九間 金堂 日十八間 十一間 西金堂 日七間 十四間

南圓堂 日八間八方 南大門 日十一間 四間 中門 日十一間 四間

廻廊 日六間 百六一間 西室 日六間 三十一間 北室 日六十一間 六間

中室 日六間 三十一間 鐘樓 日四間 六間 鼓樓 日三間 四間

西金堂 附伽藍

西金殿 土用象堂の存否は出さず

残り諸堂

東金堂 北圓堂 食堂 勸禪堂

大御堂 五重塔 三重塔 細殿

電殿 勸学院 三ツ藏

藤家の氏寺とてけりて回祿のり大分なりけりて
是れりしり 然家也けりしありて太神宮第
法初の法沙法あり 日十日法傳ありて惣田宮にて
天下太平の法初禱内務権臣尾張右兵衛伴光
命を奉次

奥福寺 元明帝和銅三年建南都

冬焼去陽成院の元慶二年始元後朱雀院の寛
徳元年後治泉院の康平三年始川院の康和三
年高倉院の治承四年後宇多院の建治三年後

奈良院の亨祿四斗に上七ヶ度と一夜回祿と共小
八度欵

大槩伽藍の災ハ四天寺東大寺延暦寺も五粒夜
火あり此寺も再起昔と和らぐ交多し但京沙の
法務寺元龜寺ハ園戒坊派の大伽藍なり一ニ為
廢の收祿後侍りも慘むべきや法やを他京
沙より法州名藍古跡の廢遺杉多し皆是曆教
湍田派を侍り候や

○ 廢^{ツグ}清淨專上人初春之韻

鶯聲呼夢已清通 吟袖不寒林下風
墨洞水消磨殘月 玉塵霞彩昼漫空

○ 東より文のつかりふなき考たり七回のあるをきと公に
侍りて
山開春色雲眉綠 池浸如光水面紅
迷蝶蘆之知奈事 羈華絆聊惱游躬

いしを寺の浦にうらむも
何れあはれ神ふれ乾白なま
春の忌林乃ちもあもあふふん
ちりたりあはれあはれの中

ふ
思ひやまのふれりのうらむ
うらむあはれあはれの中

西の垣端一町東ハ中庭本材木界南ハ高橋山ハ中
橋廣小路ホ焼一即耐亦式部山治ナリ焼出ク
戌の初迄才徳界灰を水ナリナリ也

○華頂大沙の法忌ハ西蓮精舎引奈の存仏云々トク
一章の香燭を飾リ侍リ

新柳階前春展卷 古梅園裏曉焚香

月残華頂紫雲深 遍照恩光上道場

亦秋涼の心を

力を以てぬきりハ嬌ハ有明の

月をとり毎の西の山乃端

○或人云無官大夫敷盛の妻沙彰堂ハ扇を打初メ

りとのあり也云按察使資賢ハの息女敷盛之室其夫

死後ハ祐寛園梨の御影堂の才多ナリ剃髪シテ

生ハ房如佛尼云々也ハ新若光寺の御影堂傍小

ハ院を建蓮華院ト号シテ住リ一旦後法親帝

の皇子信法院の王阿上人病の事ありテ存ありテ

尼公アキ袖扇を製シ祐寛堂ニテ加持セシキニ上人の

病を拂ヒテハ熱毒散多シテ平愈

あり一是より彼寺傍扇を打ナリ

沙彰堂ハ檀母皇后の刺毒ナリ王和上人

以来阿宗の毒ナリナリ也

○是ハ身東於牛込桑の町ニありハ女医ハ病ナリ

第を潤すか今一其孫真人の医を以て世に大功
を殊きり其千金要の才も亡失水蛭の類に用
ひしも君子其物命を損害する事を以てしる後世
以後の欲を忿りてあつたを補腎房中の邪術
よまを以て生靈を殘害するも此少から何れ物
命を断の罪におとせしる況や淫惑を起して後を
トしませしあしり正しつる子を殺しもなきや涉る
き怨を悔む事なき也

○ 神農本草經の生物を殺して第を以てする
大際草木の用務を医するに足りしは亦も書
字を以て名づく後世の^{キツ}醫^{カシキ}多る多る禽獸昆虫を

害して方を術し去り亦て愛して死人枕 林天蓋

紫河車 紅鉛 人膽 等 所有 名 淨 雜 物 を 以 て 治 療
の 用 あり 近 世 靈 藥 の 肉 本 乃 伊 亦 人 肉 あり 此
う や 嗚 呼 人 を 以 て 命 を 奪 其 不 仁 の 至 極 也 其 子 孫
忌 悔 する こと 多 也 多 也 此 亦 亦 の 物 を 以 て 且 命 を
長 く する こと 亦 得 あり 命 命 を 以 何 人 かり して 大 方 妄
説 の 方 書 多 何 ぞ 其 事 ぞ 也

世に靈天蓋を求むる者 寺院の墓所より密棺
をとりて死体を損壞する事ありしや可痛
可懼嗚呼

○ 正月十日 奈良 火災 高島 寺 神人 あり

高家数百軒也けし春日の森又火うりて神宮も高より火うりし相貞起地身て右杉子孫株伐拂いしりし神籬事おたりしとせん

此寺無福寺也城在藤氏の官家門をりて胡参州一白馬以下の前々も信りせせりしとせん
とや甲一井百京南少崎の寺高三百戸計と
城とて室寺也上とせん

○ 田中右兵衛の刻をうりし東部小石川三橋より火起り井出守右兵衛抄節小風をけし九山兼坂火起り後
是水戸炭の法被ふ吹け急き城一水邊橋の地地
をうりて高角城ゆく神田権橋等の城門城落

堂中も多りし城をうりし有司のうりし防護
しをうりし護持候は常廟造りしとせん
殿堂の法衣袴取たりし法堂候もく回祿と云

本郷白山小石川法門の内小川界飯田町鎌倉
東町石川大傳言町以下九段法門以南芝沙
門の以山と云方と皆城東は美藤島秩畑洲伊島
と云

沙既も城此馬を我公の出候大名少佐籠し只色片
時の灰塵も好く信り福井少将津山の少将及び此年
老よ土浦の侍従定津宮の侍従笠間の侍従木
第酒井雅樂次酒井修理大夫をけしと然本の

侍従佐賀の侍従古河の侍従中原の侍従姫路の
侍従大久保戸田橋葉等の諸家大名中名総て三
百六十餘所市井凡三百早かりりりや相立女三百
餘り焼死す焼死の男女救百人恨煙を吞
く慈老もあつたに満つ然のうなは肆塵物の直
通りぬく目も言く災なきがたも亦有りては
侍らぬ人々東より中道より七日十日の災とこと
目もあつては侍らぬ人々亦かく大火ありて上中の慈世
の費耳をいひては侍らぬ人々

廿日の昼赤旗をこ亦二十町後火事廿日の津川
火事と云ふ

苦累は此を極くたつては女うりては女も歎境
甲斐の火事もこれたれは自分ゆりて忍去のうりて
も甲斐侍らぬ人々磐花の於ては毎まきハリマ
粒火災しりて志川は好侍らぬ人々は浮世もいと
川くのうりては侍らぬ人々は浮世もいと
かきしをたつ侍らぬ人々は浮世もいと

世をたつては侍らぬ人々は浮世もいと

世をたつては侍らぬ人々は浮世もいと

おまひやうきをたつ侍らぬ人々の浮世もいと
あやうき

おまひやうきをたつ侍らぬ人々の浮世もいと

かきくぬきくぬきの焼野
○立巻上人の筆善の証

行きのいさくすくすく彼者
いさくすくすくすくすくすく

上人元且よりあるは初初初

長くぬきぬきの証

よきよきよきよきよきよき

○二月五日先元梅馨院五十回の追責より一行院より
けきすくすくすくすくすく

遠はるる月々もあつたにゆき
いらちのきいゆきゆきゆき

○夜の梅盛りより一は友のくくくをば

あまゆきききききききき

きききききききききき

○丁酉二月七日應夢山より敬廟を待てる此夜

お礼を絶へんと方丈より一監司の指揮をよめる

浮廟よりある石階をきききききき

尾上の木々緑清くすくすく但馬の君は存をき

燈山よりあるきききききききき

きききききききききききき

公恩のほくすくすくすくすく

られ侍りし兵社足代はきききき

おもひしすてはせむる寛き 法直好まひ
もを教して忠義の節中あまのくにたんと今一
しゆの思ひしを侍る是傳ふ先君不息の神徳
もよかにしるする法利無きしし力の毛いしし
是くしよなり 秘授經 一百部 及び六字聖号 十万遍
弥陀根本大咒 五百遍 唱有りて 先公自受法樂
と妙くわをも具へ御義の法靈又回向し侍る祥
堂のあまなる梅の白くしし乃侍るくハ俚語を
ししして文室麟山和尚よ中わをせし

夢山夢絶蝶魂疑 更聴朝鐘記往時
古殿風寒梅獨笑 春容幾歲雪霜枝

かくて紀殿を御する小才一光源禪師 大學福抄の附録
造立のゆきを齋り跡ゆる古製むしし是くしし悲願
大薩埵いりたりとてしし 小梅の千体 岡山塔
のあまなる五梅いしししし もあり 艶念法系跡文
乃之し上在位職の昔尋しし 春も思ひ出れし
山うけやしし祈念のたしし
かきしし能妙ふ庭跡むせし
吾飛岩のさしし 口より 恒水垂懸流き山くの新
晴眉端より 杵水野山より尾張部の神社を
此れは當國大明神と稱し 尾張氏の祖
小豊命のあしし 其裔 尾治金連も金神

社に流産ありおぢい山よ 先公此山に 靈根をたゆみ
しせりよ祖あり 國造の古廟に 満ちたをたも何
よしを流産しよ 且里をくしして 地はくし何なる
衆事にもはらうし かつぬ所もはら 程に年々の後 去
墓よりくし中し 海守をき 常地たりしと 起すし
里に在る 伊流岩を越えて 水野の里をこき 意
井よりる 志水法師去り 夢よりたりし 事果たり
すし 此より 此より 水のありし 事

花よりくし 此より 此より 此より

平揚に 滋川神社あり 延喜の神名式にも 傳る物記
平繁連公の 祈り 是も 尾張氏國造の 神名に 記る

やうに 大森なる 具壽山が して 大森新寺 瑞
廟の 法生 妙欽 在院 大夫人 香華の 場にして 常
不退轉の 念仏 念ふの こと あり 難き 至孝の 心口
も 法牌子 御す 事あり 杉が 日中の 神名 ありて
いし くだし 五部を 統轄して 不歩十悪を
撰取し 石控 利益 安樂 大事 因縁の 一行 三昧
束法 延年 傳之 退轉 一切 法生 彼佛
國を 公恩 する 難し かく けり
くし つかる 芳流 を 御す 事あり する 事あり あり
此より 此より 此より 此より 此より
南無 此より 此より 此より 此より 此より

あつたはらけをたむくらした

方丈といひて立寄は小畑森山よりして矢田川
原より入る古抄禅寺ともありて寺のりか
い目まけをたすおとあ川よりわら土
橋うけて是もぬらまきいりて山田を一庄の号
たつて亦一村の名ありて尾張源氏の称号あり
のこも山田安食^{アツキ}菱野たんととも其高あり扱
も今日一日は道すも思ひより寺を築して
いれりともいひをの侍り時長保は奥あきもお
つり昂平の御法なり計せ

○丁酉佛涅槃忌彼岸会中日ふありけりける時長

もいと締なりとのをき例を考ふる

慶長五年庚子 自是二十年
之後

元和五年己未 自是二十九年
之後

明暦三年丁酉

共二月十日彼岸会の宵四日也此後六十二年
くく七歳亦終り百十餘子の男只四度也

○城南阿弥陀寺の本像の刀藏相を新造して点眼
修葺あり日ありかみ附取なりと多く是後
侍り大雄山の繩窓いのもあり人立なり^本と
ねむ大光禅院の遺影をいひ附務よきこと
訓談よりく其流通ふと世皆無名ふ會を心



